

2022年7月号

文化財再発見コーナー

たかおか

おん こ ち しん
温 故 知 新

伏木の有力な廻船問屋に宛てた
さんぶつかいしょうたしもうしつけじょう
「北海道産物会所用達申付状」

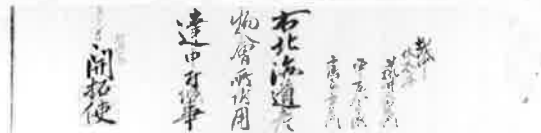
江戸初期には木町が主要な港でしたが、千保川から庄川へ流路を固定する治水工事が完了すると、次第に伏木湊が発展し、高岡の外港として重要な役割を果たしてきました。

その主役は北前船です。北前船は単に物資を運ぶ「運賃積み」ではなく、船主（船頭）が自分の才覚で商売する「買い積み」がその特徴です。主に米や鯨鯨などを北海道へ運び、昆布や鯨肥料などを仕入れていました。そして大坂へ米や鯨肥料、木綿などを運び、帰りに木綿原料などを仕入れるといういわば“三角貿易”をしていました。

伏木では江戸時代、船関連の店が多く建ち並ん

でいましたが、その中心は鶴屋(堀田家)を筆頭とする「七軒(当初は八軒)問屋」という廻船問屋で、能登屋(藤井家)などが有力でした。

明治維新後、北方開拓を重視する政府は開拓使という役所を作りました。写真の史料は、明治3年開拓使(新潟出張所)北海道産物会所用(領内の産物を統制する場所)が、廻船問屋である藤井三右衛門(能三)、車屋(八坂)金兵衛、鶴屋善右衛門をいわゆる「御用達商」に任命したものです。この三家が当時、政府にも認められた伏木の有力な廻船問屋であることを示しています。この後、藤井能三は、日本海側で最初の西洋式灯台や測候所など伏木港の近代化に奔走しました。(仁ヶ竹主幹)



▲「開拓使北海道産物会所用達商任命書」明治3年【博物館蔵】

問合先 博物館 ☎ 20-1572